

水 稲

上川農業改良普及センター
TEL (0166) 84-2017 FAX (0166) 84-2009

平成30年は6月中旬から7月中旬の低温・寡照の影響により穂数が少なくなり、収量の低下につながりました。また、低蛋白米の出荷率も全道的に低い傾向でした。

ホクレン旭川支所管内の「ゆめぴりか」低蛋白米（第1区分S）出荷率は全道平均に近い割合ですが、基準品（第1区分S+第1区分）の出荷では全道平均を下回っています（図1）。

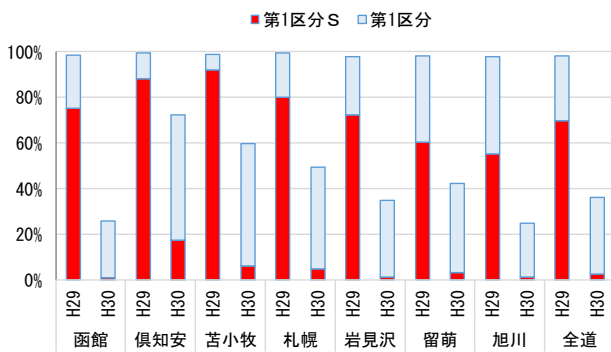


図1 「ゆめぴりか」ホクレン支所別出荷状況 (H30. 2. 1時点)

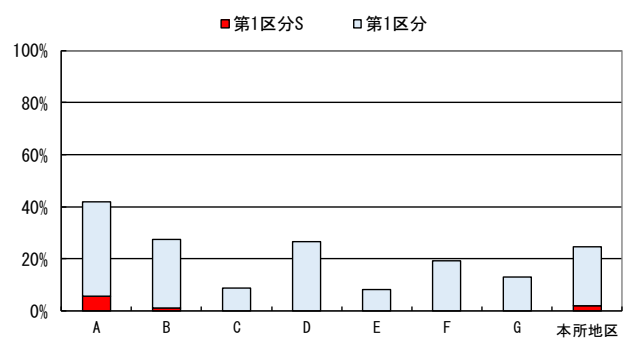


図2 「ゆめぴりか」上川農改本所地区内JA別出荷状況 (H31. 2. 1時点)

上川農業改良普及センター本所地区内の「ゆめぴりか」基準品の出荷割合は約23%でしたが、JA間でも出荷割合にばらつきがあります（図2）。

低蛋白米を安定的に生産し、「良質・良食味の上川米」とするために育苗からの基本技術を徹底しましょう。

1 「温湯消毒済み種子」の浸種日数と浸種温度

温湯消毒済み種子は、低温や長期間の浸種によって発芽率や出芽率が低下します（図3）。

適正な水温と計画的な浸種・は種により齊一な出芽を目指しましょう。

- 浸種の温度 11~12℃
- 浸種の日数 7~9日間
- 水は2日に1回交換する

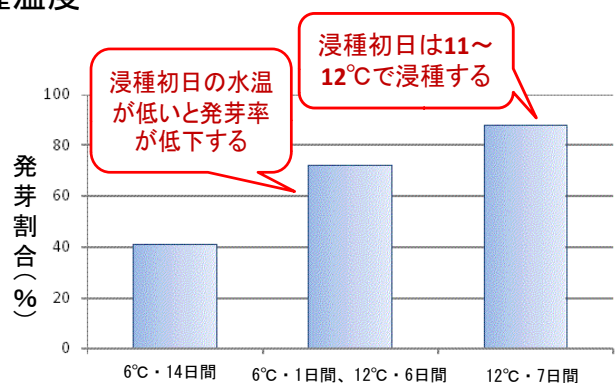


図3 浸種日数と水温が発芽に及ぼす影響 (H26 上川農業改良普及センター士別支所)

2 褐条病防除のための食酢処理

褐条病防除のため食酢処理を実施しましょう（表1）。循環式催芽器の場合は、穀物酢を50倍に希釈し、催芽時に使用します。蒸気式催芽の場合は、穀物酢を50倍に希釈し、浸種の最後の48時間（許容範囲：24～72時間）に使用します。

表1 食酢の使用法

催芽方法	食酢の希釈倍率	使用時期	使用食酢
循環式催芽器	50倍 (濃度2%)	催芽時	穀物酢 (酸度4.2%)
蒸気式催芽		浸種の最後の48時間 (許容範囲：24～72時間)	

3 成苗ポットの「楽ちん育苗(置床鎮圧育苗法)」

楽ちん育苗とは鎮圧ローラーで置床を踏み固め、成苗ポットを設置する方法です。

～メリット～

(1)作業性の向上

- 育苗箱設置後の踏みつけが不要。
- 通路以外も歩行可能。
- 苗取りが容易（簡単に剥がせる）。

(2)苗揃いの向上

- 置床土壌水分が均一となり、出芽が揃う。

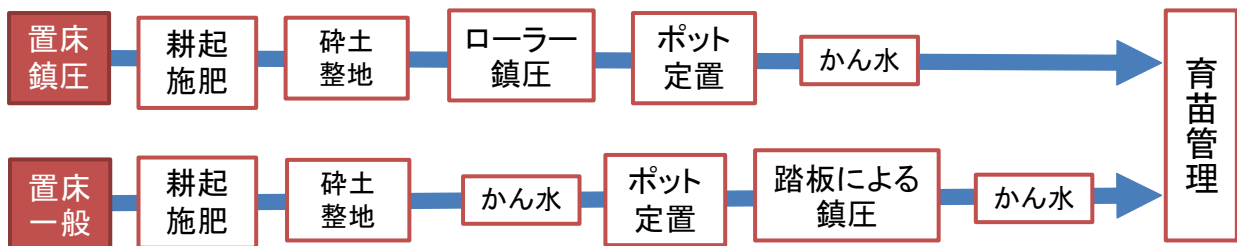
(3)根巻きの向上

- セル内の根巻きが向上する。



写真1 鎮圧作業

○作業工程



※注意事項

- 早めに融雪し、置床を十分に乾かす。
- ハウス全体を均平にする。
- 鎮圧後、段差直しを行い、置床とポットの間の隙間を作らない。

4 は種計画と早期異常出穂の防止

移植後半は育苗日数が長くなる、外気温が上がる等から、老化苗となりやすく、早期異常出穂の原因となります。

適正な葉齢で移植するために移植日から逆算したは種日とし、は種作業の間に休みを設けることを検討しましょう（表2・表3）。

また、早期異常出穂を防止するため、2.5葉期以降は25℃以上にならないようにハウスを管理しましょう（図4）。

表2 成苗ポット苗における早期異常出穂を抑制するための目安

品 種	移植時苗葉齢
ななつぼし	3.6～4.0葉
ゆめぴりか	3.6～4.3葉
きらら397	3.6～4.4葉

表3 育苗日数の目安

成苗ポット	30～35日
中苗マット	30日

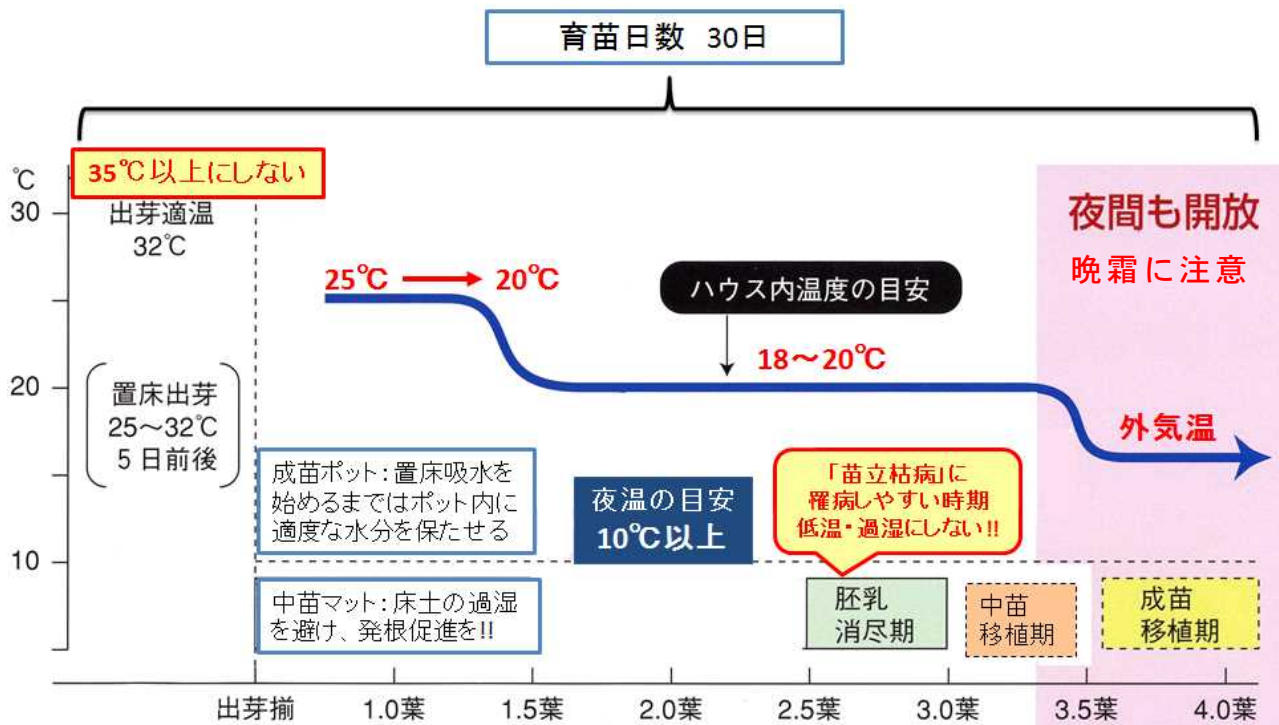


図4 育苗期間中の管理基準

5 育苗の適正管理

● 育苗追肥

中苗マット苗は 1.0～1.5 葉期、2.0～2.5 葉期に追肥します (表4)。

成苗ポット、型枠苗の追肥は不要ですが、育苗後半に苗の老化が懸念される場合は追肥を行いましょう。

「ゆめぴりか」の成苗ポットは、苗代分けつを確保するため、2.5～3 葉期の展開前に追肥を行いましょう。

また肥料ヤケを防ぐために、追肥量を守りましょう。

表4 育苗期間の追肥基準

育苗型式	1回目	2回目	3回目	1回当追肥量
中苗マット	1.0～1.5葉期	2.0～2.5葉期	(3.0葉期)	窒素1.0g/箱
成苗ポット 型 枠	—	—	(3.5葉期)	窒素0.5g/箱

NP化成57

箱マット……………7g/箱

成苗ポット・型枠……………3.5g/箱

くみあい苗床追肥用液肥

箱マット……………液肥 5ml・水500ml/箱

成苗ポット・型枠……………液肥2.5ml・水500ml/箱

6 初期生育の促進対策

(1) 本田の乾燥化

春の耕起前にはほ場が乾くことが必要です。乾土効果により初期生育が向上します。ほ場の停滞水は溝きりを行い、ほ場の外に流しましょう。落水口の点検、暗渠への水道確保など、こまめな管理に努めましょう。



写真2 溝切り例

(2) 移植時期と栽植密度の確保

初期の茎数確保（6月20日頃の茎数）で品質と食味が向上します。

移植は5月25日までに8割以上終了しましょう。経営面積が拡大した現状でも、5月末日には終了しましょう。

また、栽植密度を高めることで品質・食味が向上します。

特に、「ゆめぴりか」は密植にし、低タンパク米生産をめざしましょう。

表5 適正な栽植密度

成苗	22~25株/m ²
中苗	25株/m ² 以上

(3) 適正植付深

適正な植付深度は1.5~2cm程度です。3cm以上の深植えは生長点の地温が低く、苗代分けつの枯死や分けつ抑制につながります。適切な深さで移植しましょう。

7 土壌診断に基づく適正施肥

(1) 不稔の抑制、タンパク質含有率の低下には、多窒素栽培は厳禁です。窒素施肥量は土壌診断に基づく量を基本としましょう（表6）。

培養窒素（窒素肥沃度）の高いほ場や、前年にタンパク質含有率の高かったほ場では、側条施肥割合の増加と全層施肥の減肥を検討しましょう。

表6 施肥標準と土壌分析に基づいた窒素施肥量(上川中央部)

土壌区分	目標収量	標準施肥量			施肥標準に対する施肥窒素増減量(kg/10a)			
		窒素	リン酸	加里	+0.5	0	-0.5	-1.0
					窒素肥沃度水準区分(mg/100g)			
低地土(乾)	570	9.5	8.0	8.0	~6.0	~10.0	~12.0	~12.0
低地土(湿)	570	9.0	8.0	8.0	~7.0	~15.0	~18.0	~18.0
泥炭土	570	7.5	8.0	8.0	~5.5	~13.0	~15.5	~15.5
台地土	540	8.5	8.0	8.0	~5.0	~13.0	~15.0	~15.0

(2) 良食味米生産のためにはケイ酸の施用が欠かせません。土壌診断に基づいてケイ酸資材を施用しましょう（図5）。

幼穂形成期1週間後のケイ酸追肥は、窒素肥沃度が中位以下の場合、タンパク質含有率を低下させる効果が期待されます。積極的に実施しましょう。

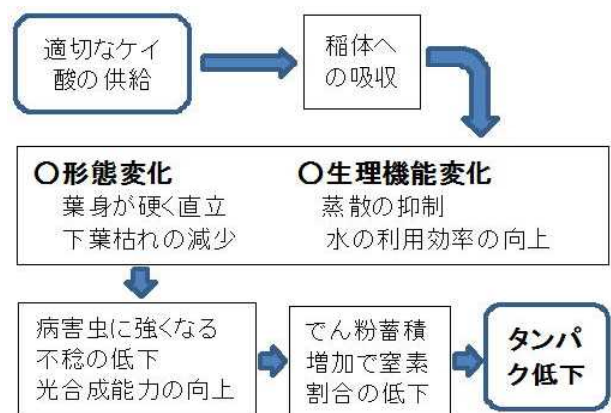


図5 ケイ酸の施用効果

農作業は十分に余裕をもって、事故・けがに注意しましょう！